

---

# 天河を渡る仮初めの恋

レイ@名無し

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

天河を渡る仮初めの恋

### 【Nコード】

N5601E

### 【作者名】

レイ@名無し

### 【あらすじ】

完結 2008年【七夕小説企画『星に願いを』】参加作品  
「大好きな人」 それは恋人でも夫婦でもない。家族でもない。ただ「大事な人」に逢うために、この世界に訪れた異界人。彼女の思い出は、遠く封印された記憶。記憶をなぞる夢は、路行く足元の灯し火。 日常の片隅でほぐされた系の物語は、自分でも理解のできる当たり前の事だった。「どうか、夜闇の深さも、星の輝きも、あの人を守って下さい」と、その願いは大事で大切な人がいるなら、誰でも祈るはずだから。

Missing 1 見知らぬ面影（前書き）

七夕小説企画『星に願いを』参加作品です。

「七夕小説企画」または「星に願いを」で検索すると、他の参加作家さんの多様な作品をお楽しみいただけます。

公式サイトは各頁の下部のバナーから。

「アナタ、結婚してる」  
唐突に言われて、世の独身女性のどれだけが、どういう反応をするんだろうかと、自分も驚いてはいたが、こんな妙な事も考えてしまっている。で、しかし激しい否定もしない自分に違和感が無かった。

眼を剥くようにまじまじと相手を見つめる。

「結婚」

「そう、結婚」

彼女は繰り返した。

「……そうですか……」

「びっくりはしないんだね」

こういうときは、どうしたら良いのか分からなかった。

真っ向からヒステリックに否定するのだろうか。

いや、それよりも、この場合はどう否定していいのか、方法が無い。

否定する材料が無い。

「びっくり、と言うか……」

自分は今現在、どうしようもない独身真っ盛り。

「結婚ですか……」

冷静と言うか、以外に平静な反応だったと思うのに、膝の上に置いた手が小刻みに震えている。

見知った人影が、胸裏をよぎる。

薄茶色の、私を真っ直ぐに見つめた優しい瞳と、瞳と同じ色の緩やかなカールの髪の男……

好きな人は、居たと思う。

小学校の学校祭で他のクラスの子たちが、星の河を挟んでお姫様星と王子様星の可愛らしい恋の舞台劇を披露していた。

嫌いな人は殆ど居ないだろう、スタンダードなハッピーエンドのお話。

担任の先生もよく吟味してのキャスティングだっただろう。主役のお姫様星と王子様星をやってる子たちが、とても輝いて見えてた。中でも王子様星役をやっていた美少年に、私は釘付けになった。

色白な肌に赤い唇で、サラサラの茶色っぽい髪と瞳。

劇の役も相まって、とても神秘的に見えた。

物静かで、大人しい子だと、数年経ってから知った。

クラス替えて同じ学級になったのに、あんまり話をしなかった。

それ以来、私は『その面影』の虜になった。

初恋と言うのなら、それが該当するのだろう。

ずっと好きだった。

思い出と、その面影が穢れないように、ずっと大事にしていた。

恋に恋した思いは叶うことなく、手にした何よりも大切な宝物として誰も知ることの無い心の奥に仕舞いこみ、その後も好きな人はできたけれど、彼らは必ず「どこか見知った面影」を宿す容貌をしていた。

ただそれは、単に思い出に縛られたような自分の好みだと思い込んでいた……

……あ、俺？

……うん……、いいよまだ……。

……分かった。それじゃ。

小声で一通り会話が終了すると、通話を切った。

なぜ「小声」かと言うと、此処は大声を出して話をするところじゃないからだ。

大通りから少し狭くなった小路に入って、鬱蒼とした木陰の中に目立たなくて意味の無い看板をようやく見つけると、和の風情漂う格子戸をカラカラと開き、玉砂利の敷かれたもつと狭い路を奥へと入っていく。

まるでお茶を戴きに茶室へと導かれるプロセスを、そのまま模倣したような造り。

やがて同じく鬱蒼とした木々に埋もれた、一見デザインハウスの如く洒落た一軒家があるので、指紋がついて汚れるのを躊躇うほどに、美しくカツティングされたガラスを嵌め込む扉を、涼やかな音を奏でるチャイムと共に開き、入店する。

ダークウォルナツツの木目床。

シュガーホワイトの壁、天井。

イタリア製ウォールライトとスペイン製スタンド。

白いガラス加工天板のカウンターと、白天板とガラスのテーブルが交互に並ぶ。

アイボリージャカード布張り猫足の椅子。

ありがちなカフェカーテンとかは無し。

白と濃いチョコレート色と、透明なガラスとスパークリングゴー

ルドの弾ける煌き。

ヨーロッパ調の高級ホテルラウンジとかみたいな造りの、おとなな佇まいのカフェ。

会社の営業で出たときの昼休みとか、休日のメシとか、そういうのをよく食べに来たり、時間を潰したりするオレが住……いや、常駐カフェ。

結構大きな都会にも、こういう閑静な空間があることがオドロキなんだが、そこだけ切り取られた空間みたいな小奇麗なカフェが、オレの憩いの場所だ。この飽きの来ない雰囲気嵌ってるんだと思う。ま、似合わないのはデフォですが。

で、今日はしっかりと休みの日で、休みの日なのにしっかりと来ているオレがいる。

オマケに、月に一、二度くらい目の前には美女が相席するのが、ここ一年くらいの日課になってる。

と思つたら、カフェのドアを軽やかに開けて本人が来た。

「……この時間に御来店と言うことは……また『彼』ですか」

「オハヨ。うんまつたくその通り。いまクリーニング屋さんに寄ってきた」

「お疲れ様です。つかお宅の部屋に“また誰か出てきた”のかと思いました」

「いや、昨夜は別になんのお化けも出なかった……なんかねえ、メルが変な時間に入ると思ったら、また海外出張だったみたいで」

「相手の行動様式を把握してないのもどうかと」

「知らないよ。こつちも都合あるんだから　　また空港からウチに直行してきたから、御飯作りおきして、猫に見張りさせて、邪魔しないように早く出てきたの。御土産がどのバッグに入ってるか聞く暇も無かった」

そう言う彼女はどこか悲しそうだった。

御土産がなかった事が。

初夏も過ぎた盛夏手前、彼女はコットンの白い襟シャツとジーパンに、ミュールを突っかけてきた。

「今日、雨降るの？」

彼女の片手に握られてる傘に気がついてオレは聞いた。降ったらヤダなあ。

で、もう片方には読む暇が無かったからか、新聞が握られている。お前は何処のオヤジかと。

「ああ、これ？ 一応、雨の予報の出たんだけど、晴雨兼用の傘だからどっちでも使えるんだよ」

チャコール・グレイの瞳でニコと笑い、そして、オレの向かいに座る。

てゆうか、但し、勘違いはするな。

彼女はオレの「彼女」ではないし、まったくの「友達に近い顔見知り」だ。

つつか、そういう関係があるのかって？

そういや昔、男女混合の数人で遠征先のシティホテルに泊まって、現地の友人と合流し呑んだ時なんだが、そいつ「男と女がそういう状態にあつて、何にも無いわけが無い」と言い張るんで、一緒に居た女の子の手前、ちよつとだけ張つ倒した事がある。

「絶対に何かが起こる」て局面を想定しておきながら、「絶対に何も起こらない」或いは「起こらせて貰えなかった」て対極の事態を考えられないのはどうかと思うんだが、つまりなんだ、オレは結構女の子に「安全」て感じで頼りにされてる、ある意味ヘタレな男です。（がっくし）

話を美女に戻したいんだが、彼女をこのカフェで見かけるようになったのが一年半くらい前。

肩より少し下に長いぐらいにある、天然なんだかオサレなんだか分からないゆるクセ毛っぽいスタイル、天然ダークブラウンで、濃い目グレイの瞳をした身長百六十センチくらいのスレンダー！。

え？ どこが美女に見えるって？

人の好みってあると思うけど、十中八九は「可愛い」より「キレイ」とか「美人」って評されるタイプ。

目鼻立ちなんかは「そんなに」濃くは無いけど、ちゃんと化粧したらさぞかし化粧栄えするだろうなあ、みたいな。

で、オレ的に何だか目に付く人が、オレが常駐するカフェに出没するようになったら、当然気になるんだが、勿論、オレと彼女の生活時間帯だって異なるわけだから、いつもオレが行くというわけじゃない。

運良くバッティングしても、こういうカフェだからナンパだとか、居酒屋みたいに盛り上がるような場所じゃないし、彼女は本を読んだりノートPCを持ち込んだりして静かな時間を過ごす。

（オレだって本を持ち込んだりしますよ？）

……それならネカフェ行行って？

いやー、彼女がネカフェに行ったんなら、思わず探しに行っちゃうかもしれないけど、ただね、こういう落ち着く場所つか、こう……澄んだ知性のある空気ってところでネカフェとは違うのだよ、ネカフェとは。

それで彼女を初めて見てから半年くらい経ったとき、たまたまカフェに行ったら混んでたんだ。

こういうところは混んではならない設定になっているのだが、間違っただけのときもある。

そしてオレはマスターに言うのだ。

「……メシ……」

どうしたらこのカフェを造り得たセンスが出てくるのか不思議でしょうがない、額から頭頂部にかけて広範囲の見事なハゲを隠そうともしない禿マスターは、思いつきり慈愛の眼で見つめてくれた。

そのつづらな瞳の奥で何をかいわんや。

（御飯を作ってくれる彼女を見つけないさ）

神のお告げはマスターを通して伝わった。

な、なんだとおうっ。

この禿マスっ。

今日の混みカフェは何の陰謀だ！

その禿が時々ちよつと忙しいだけで皮脂テカって来るのも、マスターが油取り紙を禿に当てて、テカリを押さえてるのもオレは知っているのに！

だが、まだまだ育ち盛り食べ盛りのオレは引き下がるわけには行かない。

昨晩は仕事で遅くに帰ってきた拳句、疲れ果てて喰ってないし、朝飯なんざ起きた時間が朝飯じゃないし。

血糖値の下がったアタマと身体で、気分は匍匐前進のごとくようやくココに来たと言うのに。

だからもう一度窮状を訴えた。

「……メシ……」

するとマスターの姿の前に、急に影が横切ったかと思うと、マスターの奥さんが腕を引っ張って「相席でもいい？」と聞いてきたではないか。

オレは相席を承諾した、いや承諾したというよりも、飢餓状態に陥って力の無い体を揺すられた形になったもんだから、頭が自然に縦横斜めに揺れただけなのだ。

これを奥さんがどう判断したかは不明だが、恐らく、もうどうにでもなれ。

しかし、奥さんの動きは、温厚でスロウなマスターよりも機敏で俊敏で加速装置が付いているんじゃないかと思えるくらいだ。

空腹で空っぽの頭がぐるぐる無駄なブドウ糖の消費をしながら、その加速装置に連れて行かれた先に、なんと『彼女』がいたのである。

まさに千載一遇の……なんだっけ……もう……フランダースの犬になりそう……もうね、なんだかね、眠いんだよ……

奥さんはまるで母親のように、彼女に「宜しいですか？」と尋ね

て、了解を貰って、椅子を引いて、オレを座らせて、御絞りを両手に開いて掛けて、「いらっしやいませー」と、ひっきりなしに開くカフェの玄関に愛想を飛ばし、そして自らも飛んでいった。疾風のように。

そして、オレの前には美女。

この状況をなんとする。いや、むしろ察しろ。

どうもせんがな x

どうもできんがな

「メニュー要ります?」

先に口を開いたのは彼女。オレ涙目。

「あっ……」

メニューは決まってて、且つサイクルがあるのにも関わらず彼女の白い手からメニューを受け取ってしまった。

ただかかせていただきますとかって戴いたりナンかしちゃったりナンかしちゃって。

日本語おかしくなりそう。

「た、たまには色んなのを食べるといいですよね」

しかしなぜ、ヒトはこういうときにわざわざ健康に気を遣ってしまふのだろうか。

「でも好きなのを食べられるのも、若いうちだと思います」

「ですよね」

間髪いれずに相打ち入れたオレのばかばかばか。

そういうわけで、そんな経緯いきさつがあつて何となくお茶とかお茶とかお茶とかするようになって(途中省略)、でもって今日こんにちにいたる。

話が繋がらない上に、何が言いたいかわからない?

天河を渡る仮初めの恋

つまりだな、それは。

それはですね。

「 そうそう、今日は試食だって言ってたよ」

あつ……………横槍……………せっかくの回想シーンだったのに。

「 ……え？ マジ？ ジャンボカツサンド食おうとおもって来たの  
に」

「 その勢いだと三皿くらいいけそうなんだけどね」

「 しょーがねーなあ。カツサンドも頼もうかな」

「 試食だって量大目に作るのに、そっち行くか」

「 喰いたいモンは喰いたいんですっ」

休日の昼過ぎ。

日差しが、カフェの大きなウィンドウを斜めに差し込んで、店内の窓際に鋭角な白い世界を形作っていた。

昨夜は雨だったから、少し湿気があってムツとする。

「 店内も客少ないし、日差しが入り込みそうだから、もすこし奥の席に行かない？」

「 ん、そう？」

生返事をして彼女は、ガサガサと新聞を折りたたんで眩しそうに窓の外をみやる。

「 暑そうだねえ」

「 だって夏だよ。もう」

「 夏かあ」

「 海へ山へレジャーの季節」

「 日焼けは大敵なの」

ま、一応、女性ではあるし

「 でも、どっかに行くくらいは……………」

「 全く予定は無いなー」

「つつか、『彼』とかからそういう発案ないワケ？」

そこで彼女がマジマジとオレを見るんで、何か失言したのかと心持ち椅子を後ろに下げた。

ちよつとだけ椅子の足がキィって鳴った。

「まあ、『彼』って言うと、『そういう彼氏』って定義に嵌はまりがちになるんだけどね……」

オレの住んでる所から、彼女は町二つくらい隣の近いところに居るので、うっかり外出すると会ったり見かけたりする。

「そりゃオレ如きが、どこをどう斜めに見てもイケメンの部類だし、傍目にはスゴイ優しそうだし、周りの女子とかからジェラシー波とか発信されそうだし、その、『恋人じゃない』ってのも勿体無いなつてのは、一般的なものの見方なんだけど、オレとしては彼氏でなくてもイベントぶち上げて遊ぶとか……」

「……どうなんだろう。分からない。会って一年近く……何しろ唐突な出逢いだっし。……うーん」

自分でも腑に落ちないような、奥歯に物が挟まった言い方をする。言いよどんでいる部分を感じられたので、オレはこのざつくばらんで飄ひょうとした人物をもすこし知りたくなってみた。

自然体で生きているような女性が、どこかミスティアスな雰囲気を持っていたのには、最初から気になってたからだ。

「出逢いって」

「ここで一呼吸置く。」

その辺の話は聞いているから、そらで言えるんだぞ。

「イベントがあつたんで友達と出かけようとしたら寝坊して慌てて出たら高くて細いヒールのサンダル履いちゃって仕方なく会場まで行ってコンクリ床の隙間にヒールが刺さって激しくスっ転んで死ぬほど足首挫いて立てず歩けず通りがかった男性にお姫様抱っこされて救護所に連れて行ってもらってそのままメアド交換してお友達になりました、つつうシンデレラのギャグバージョンみたいなお話は、普通いまどきの少女漫画でも描かないと思います」



「運命って、これまた似合わなさそうな事を言いますが」  
ところでオレ、なんで丁寧語？

「……うん……まあ」

その物思いに耽るような沈みっぷり。ああ、聞いていいんだろうか、聞かなきゃいいんだろうか。

「このハナシ、色々とおつてねえ……まあ、ファンタジー、よくあるファンタジーなんだ。聞いてみる？」

落としていた視線を上げて、彼女は勇気を出したように聞いてくる。

「ふあ、ふあんだじー大好きです。常日頃、貴女からは『この世のものならぬ』人たちのお話を窺ってますから免疫はバツチリです」  
の、はず。

「うん……あくまでファンタジーでいいよ。……三年前なんだけど」

「そう言って、彼女の不思議な世界がオレの前に展開されようとしていた。」

正直、たぶんオレは普通に一般人すぎた。

## Missing 4 風に呼応した、わたし

目の前に海があるのに、波の音も聴こえないでまどろんでた。  
内陸育ちの自分には、海に馴染みは無い。

波の音は騒々しく耳障りで、頭の中に雪崩れ込んでくるから苦手だった。

海の物語によく聞く、「水平線の向こうの失われた楽園から聞こえる呼び声」なんてのは、私の元には届きはしないだろう。

何故なら、私にはいつも何処からか、私を呼ぶ声が聴こえていたからだ。

ふとした日常に、夜に、街角に、風の中に、誰かが、何かが。中でも眠りに観る光景は、私を何処かに誘う。

幼い頃から、一見何の脈絡も無く見えるが同じ雰囲気を持ち、そして因果関係ストーリーのありそうな酷くりアルな夢を観続けていた。

夢はモノクロが殆どと言われるが、私が覚えている夢は全て自然な色の光景だった。

その覚えている夢のどれも、ごく薄い紫の霞がかかった色をしてきた。

自分の思い込みで例えて言うならば、まるで、アーサー王が湖から突き出た剣エクスカリバーを受け取るシーンに似る、霧の立つ湖水の静けさと異界のエネルギーに満ちた、不思議の国。

記憶にある幾つかの夢でも、特に覚えている『その夢』の一つ。ただ、なぜこの事を説明するのに『アーサー王と円卓の騎士』で例えるのかも理由は分からない。

興味のあるページだけ読んで、全部読破した事も無いのに、雰囲気だけは「それ」だと言えないのである。

風が私の周りを巡っていたときもあつたのに、そうした異界の感覚や記憶は大人の生活の中に埋もれやすい。

なんだか、気がついたら此処に来ていた気がする。

昼間、エメラルドグリーン的大海と、海と同じ色の魚と時々レモンイエローの魚、誰かが延々と積み上げるバナライスのような大盛りの雲と、藍色の空を見つめて、南の海にありがちな濃密な誘惑と甘さを含んだ風に当たり、砂浜を眼下に日がな一日バルコニーと部屋に独り、行ったりきたりして無為に過ごしていた。

せつかくのリゾート地に来てはいたが、プライベートビーチの白い砂と戯れるとか、肌に刺さる攻撃的な日差しを挑発しに外出する事はしなかった。

さんざ上から嘲笑っていたその太陽も大人しく海の向こうへ沈みリゾートホテルの広い敷地内のあちこちに光が灯る。

それも昼間と同じ気だるさで見やりながら、今夜もルームサービスで食事を済ませてしまった。

さすがに自分でもどうにかしよう、と考える。

「……一応、ガイドブックとか買ってるんだけど」

とは言うものの、一人旅だったから誰も頷いたり応じてくれるものなどは居なかった。

仕事の書類と、ガイドブックと言う組合せもどうかとは思うが。

ある意味、逃避行動に近い形で、衝動的に旅行に来たからだ。

無理矢理、有給休暇をねじ込んで、上司にはストレス解消ですと連絡がついても今すぐに職場へ向かえないような距離のつもりで、考えても見なかったところに来たのである。

仕事は順調だし、忙しいし、やりがいもあるし、休みの日だってある程度は一人になる時間が欲しくなるくらいではあった。

ただし、特定の人はいない。

寂しくは無いと思ってた。

急に身近な異性から向けられた熱い眼差し。

(　　)　　クライじやなかったはずなんだけど)

悪い癖で、力いっぱい振り切ってしまった。

その瞬間、忘れてたのを思い出してしまう。

(私は……ホントに男嫌い……?)

何かのタイミングで、人は一気に人生疲れてしまふときがある。  
恋愛つてのは、

周囲が迷惑がるほど、楽しいデート、  
お互いに誕生日のお祝い、

クリスマスは上等なワインと一緒に傾けること、  
急に思いついたイベントを二人だけで騒ぐこと、  
星空の下を歩くこと、

幾らでもあるのに。

(と言うか……酒の力を借りないと告白できないのも、時々女は許  
せないんだと思うんだ……)

自分でいい加減な言い訳して、それで、この現実逃避旅行。

(なんか、こう、もっと、大恋愛して劇的な何かが起きて、それで  
傷心旅行とかなら分かるんだけど……私のコレはなんの付加価値も  
ないんだけど……)

少しメンドウだったが、それでも何とか自分を急ぎたててホテル  
から出てはみたのであるが、観光地の繁華街と言うのはどの店舗も  
同じ顔で客を呼び、同じ土産品を売り、同じことしか言わない。

だからツマラナイのは知ってはいたが、それでも何処かにその土  
地の色があるんだろうと、繁華街の安全そうな裏道を覗くことにし  
ていた。人の話を聞くのではなく、自分でモノを探すのだ。

延々と続くネオンとイルミネーションと、小うるさい客寄せの音  
楽と電子音の中、私の足が止まる。

『占います』

なんて簡潔なんだろうと思ったのだ。

普通なら『占いの館』だとか、何を専門にしているとか、『売り』  
というのを前面に押し出すものだというのに。

占いか……。

学生時代は凝ってた時もあったのに、本当の自分とか、少し先の

未来を覗いてときめく事も無くなってしまった。

旅の思い出に、最終日前夜、何かやってみるのも……。

地元でもそんな気にならないのに、南国の夜は違う意味でその気にさせてしまったのだろうか。自然と足はそのブースに向かって一歩を踏み出してしまった。

「お願いします」

時折吹き抜ける風を考慮して無い風に、そのブースは天幕を張り巡らし、煌びやかに現を抜かす俗世から隔絶した世界を作り出していた。

中には三人ほどの男女がいたが、私を見ると一人の男が外に出た。女が黒い天板のテーブルに着き、もう一人の男がアシスタント風に脇に座った。

そして、女は私の顔を見るなり「これは珍しいお客さんがおいでだね」と開口一番に言う。

「どうしましょうか」

脇の男が女占い師に尋ねると「もう少し様子を見てからにしよう」と言い出す。

その遣り取りが怪しくて、私は今更ながら緊張した。

「さて、ウチはタロット、ホロスコープ、手相、靈感と色々手法があるんだけど、何を悩んでるの？」

「あ……すみません……目に付いたので、何も考えてなくて……」  
腰を浮かして退出しようかと思った。

「ああ、いいのいいの。こういうね、しかもリゾート地とかに来る人たちって、だいたいそうだから。真剣に一つの事に悩んでる人もいるけどね、何に悩んでるか分からない人もいるんだよね。でもどの悩みも悩みだから。何かしら人は問題抱えてるから。私たちはカウンセリング」

女占い師は笑って、手元のタロットカードを暇つぶしのように転がして言う。

めくれて見えた「塔」のカードにドキドキする。

「……じゃ、普通に恋愛運とか」

「料金は固定だから　色々と見てみようかね」

ふっくらとしてみても年齢を感じる手が、私の手を取って掌に視線を落とした。

「失恋旅行？」

「いえ……」

「そう……あのね、男運悪いと思ってるでしょ」

「悪い人は、そんな居なかつたんですが……」

だからといって、それに対する嫌悪感があるのは言えなかった。好意を持たれる。

自分も好きだと思っていた。

しかし、告白される時点で逃げ腰どころではなく、『この人ではない』と言った強烈な意識が生まれて拒絶してしまうのだ。

アナタハ　チガウ。

何がどう違うのか、そんなの説明も出来ないのに。

「でも、これじゃ男運が悪いつて説明にならないのね」  
初っ端から随分な部分から切り出された。

してもいない「結婚」を「している」と言われ、一カ月半くらい前に交際の申し込みを断わったんだけどなあと、ぼんやり考えた。

「思い当たる事があるんじゃない。結婚してると、他の男はそりや人妻に近づかないわね。常識の範囲内では。或いは近づけさせないとかね」

暗い小部屋にムツとする香が立ち込めた、『いかにも』な占いのブースで、私は首をかしげた。

まだ私には『結婚』の意味が分からなかったが、占い師はさらに続ける。

「これは契約 と言うか、制約みたいなもんだわね。結界の役割もしてるんだらうか」

「制約、と」  
「アナタを守護するために制限がついてんのよ。その制限が『結婚』なのね」

結婚と制約と制限と守護と結界。それ何。

「あつ……え……何ですかソレ、と言うか、私ってなんなのですか」  
「アナタ、知ってるはずなんだけどね。どっかで結婚したこと無い？」

占い師の言及に気圧されて、私は出来る限り頭をめぐらした。

結婚 結婚って……

結婚したことは無いのに、結婚

「こんなにハッキリ、旦那が居るって出てるんだけど」

ドクンと、一つだけ大きく動悸がすると共に、津波のような感覚が押し寄せて思い出すものがあつた。

「わ、私の結婚と言えば」

「なに」

「あの……くだらない事ですが……夢で、ケツコンした事はありません」

す……」

自分で耳が赤くなったのを感じた。  
結婚の夢なら、憧れはある。女ならウェディングドレスでも内掛  
けでも着て、チャペルや海外での挙式とか、眠っても夢見てたつて  
おかしくない。

でもそれをオトナになつて言うのは、一種の「恥」と言う概念に  
置き換えられ口憚られるものだ。だから他人に言う抵抗感はある。

しかし、占い師は「それぞれ、結婚してるでしょ」と肯定的に断  
じた。

「その話でもいいんですか」

「あのね、していい人と、しなくていい人がいるんだよ。でね、特  
にアナタ場合は『しなくちゃいけない人』なんだよね」

「はあ」

「だつてね、アナタね、見ても分かるけど、靈感あるし『先読み』  
のチカラもある。アナタが観た夢はただの夢じゃないんだ」

占い師は心持ち身を乗り出して、半ば捲くし立てるように力強  
く言葉にした。

私は否定が出来なかった。

視線をあちこちに泳がせて、アタマの中を整理しようとした。

「ほらね。自分で分かっているんだ。話せる？ ああ、そうだ、  
話すのが辛いなら別の手もある」

占い師は傍らの男に合図をした。

心得た、とばかりに男は布一枚で隔てた向こう側から、ガラスの  
浅いボウルとペットボトルのミネラルウォーターを持ってくる。

それをテーブルの上に置き、中に水を注いだ。

「明鏡止水って知ってるでしょ。ちよとこれから言うのとは意  
味も用途も違うんだけど、水はとも純粋なエネルギーを持ってる。  
だからどんな波長にも染まりやすい。アナタがこの水に手を入れる  
と、アナタのエネルギーの波長が水に転写されて、アタシはそれを  
読み取るだけの媒体ってことなんだ。この水、水面ね、鏡みたいな

モン。ほら、自分の顔って鏡に映さないと見えないのと同じ」

達者な口ぶりで、しかし簡潔にものを言うので、新興宗教や変な物販会社の呼び込み占いとは違うのだと感じた。

(言葉に、力がある)

そう思ったのは、生来ある「奇妙に鋭い感覚」のお陰かもしれないな  
かった。

「入るんですか」

ボウルと占い師とを交互に見やりながら、躊躇ためらいがちに聞く。

「用意はした。でも選択するのはアナタ次第だ。誘ったわけではなし、アタシはこれがアナタを読み取るのに一番よいと思っただけ」  
つまり、自己責任ではある。

両手を持ち上げて、水面に近づけた。

それからふとまた思い出すのだ。

( そういえば……私はなんで )

ココに来たのだろう

思うだけで自答にもならない流れのまま、少しづつ手を浸していき。

占い師は何の感情も載せずに黙ってみている。

構わず唇が勝手に動くかのようになり、私はボソボソと『夢』の話をしていった。

黒い長衣の服装の背の高い老人が追いかけてくる。

その人は、良くない。

私は腕一杯の一抱えもある何かとても大事なモノを持って、『安らぎの大地』で必死に逃げていた。

その山麓にあるホテルみたいな処に逃げ込んで中に入ると、私は一番近くのソファに座っていた男の人に近づいた。

腕に抱えていた『大事なモノ』を渡そうとした。

しかし『大事なモノ』は掌に握られた一枚の金色の硬貨に変貌している。

構わず私は手にある金貨を彼に渡すところで老人が追いついてく

るが、金貨が彼に渡ったことで何か立場が変わったらしい。

金貨を手にした男性は自分の名を名乗り、老人に「この人は私の婚約者だから、手は出せない」と明言し、男は悔しがったが、確実に手は出せないらしくその場を去るしかなかった。

しかし、去り間際に男は私の耳元に囁いた。

“君にはしてやられたが、諦めないよ”

その瞬間、男の狙いが『大事なモノ』や金貨ではなく、私自身だったことを知る。

それから間もなく、そのままホテル内の式場で婚約者となった彼と、式を挙げた。

「これがケツコンの夢です」

先ほどの恥かしさは何処へやら、ボウルの水に浸した手をタオルで拭きながら、思い出せる限りの全容を言い終えた。

「めでたくてヤバイ、意味深な夢だね。アナタにとって憩いの場所であるってのはアナタを護っているフィールド。そこに悪いヤツが来たってのが既にそのフィールドでは手に負えない状態を表している。そこで、最終手段に近い形で強力な味方が出てきた、と言っわけだね。……で、その、彼の名前とかどんな人かって聞いても？」

私を庇護下に置いた、権威ある男性。

その人は……そうだ

薄い茶色の瞳。

瞳と同じ色の緩いカールの髪。

真っ直ぐに濁りの無い意思を映す眼で、私を捉えた。

と……あ、あれ？

私は急に思い出した。

まって。

その男の人の容貌は、遠い昔から『感じていた』面影そのままなんだけど……。

昔から知ってて、数年前の夢で観て、その人は何故？

「名前は知ってるんですけど……」

すっかりと聞いてたし、今でもはっきりと覚えているのに、  
「他言してはいけない気が……」

まるで秘密の名前だとか、ソウルネームだとか、魔法の御伽噺み  
たいに。

「それから……とても印象に残った夢だったので、自分でも夢の象  
意を調べてみたのですが……金貨は『愛情』の象徴でした」

やはり、それは『結婚』だったのだろうか。

「いや、名前はとても重要だからね、誰かにも言った事があるかい  
？ 無い？ それならアナタの深窓意識は正常に働いている証拠。

言えないのは仕方ないこと。それにしてもね、愛情を渡して、何  
かの庇護下に入る。そしてその庇護者と契約を結ぶ拳式だ。これは  
結構な契約の仕方だ……その夢を観たのはいつ？」

「えー……たしか十九のときだったはず……」

占い師は私が手を浸していたボウルを引き寄せ、両手で抱え込む  
ように水面を見つめ、そして眼を閉じて何かに集中し始めた。

一分もしない沈黙だった。

瞼を開いて、占い師はうんうんと頷く。

「十九つてのはハタチ、つまりオトナになって社会に出る直前の洗  
礼の時期だね。特にアナタはね。そのタイミングを狙っての結婚だ  
って事か。……なるほど……」

随分と色んなものを見えているような様が、また何とはなしに面  
はゆい。十九と言えば少女が「成人する前に花嫁になりたい」願望が  
ある年頃なのだ。

自分がそこまで結婚に夢見る少女だったかと言うと、嘘でもない  
のだが……それとは趣旨が異なるのだろうか。

かなり下世話な事を考えて、しかし何か少しづつ異なっていく状  
況に興味本位の私を、占い師は真剣な色を宿して見据える。

「これは少し真面目な話になりそうだね？」

「え？」

「少し、アナタとは話し込むことになりそうだ。いいかい、料金は変わらないし、アタシはただの媒体者でありメッセンジャーではないよ。考えるのはアナタだ」

私と言う身の上に何があるのか、自分でも興味深々ではあるが、軽々しくも訪れた占い一つにしては多少気後れがする。

占い師は私の戸惑いをよそに、アシスタントの男に言って占いブースを文字通り“看板”にした。「今夜はアナタのカウンセリングで手一杯になりそうだよ。アナタが覚えている夢をどんどん話してそれは夢であって夢じゃないからね」

妙にその言葉がズシリと押し掛かる。

彼女は本気モードで構えるためか、大きめの尻をモゾモゾと動かして椅子の位置を定めた。

両腕を一旦広げて伸ばすと、すぐに下ろし再度ボウルを抱え込むように手を回す。

「……アナタの後ろにとても強い守護があるのを感じる……結構な力だね……。だからアナタはこれまでの人生で、この世のくだらない悪い人とは縁が出来ないし、悪い人が呼び寄せる悪い因縁にも遭遇して無い……」

一般にはこれを非常に幸せな人生だと言っらしい。

しかし強力な結びつきである結婚を断行したのを鑑みるに、この世界に余計な因縁を作らないよう、一種の隔離みたいな状態とも見えるのだ。

「だからね広く浅くの付き合いで、親友とか、オトコなんかも出来にくい理由にもなってる。その辺はちよつと寂しいね」

それは安泰な人生のためではない。

それだけの使命リスクを持っていて、その分強大な敵がいるって事の裏

返しなのだそうだ。

ところが、“敵”は私を貶めようと虎視眈々と狙っているのだと言う。

「守りが強くて手が出ない。だから悪人を近づけたり、都合よく身近なちよつとした事故や事件を起こしたりできない。どうだい。そのかわり寸前で回避できたことつて、記憶にないかい？」

「……死にそうな目には生まれた時から……そういえば幾つか……社会的に大きな事件や災害とか時間が数日とか数分とかズレてたり、その場に居合わせても向かった方向が違っただけで、とか、運が強いだけだと……」

「それだね。それだ。大きな事件が起きるには、その分の負のエネルギーが大きくなくてはならない。日常生活の中でアナタを殺すには、負のエネルギーが小さすぎるからダメなんだ。より大きな渦の中に誘い込んでしまわないと、アナタには手を出せないと言っただ」

「……私はいつから偉くなったんですか」

「自分では考えられないだろうけどね？」

「……はあ……」

「それと……この世界の霊獣が傍にいたね」

「霊獣ですか」

「色々いるでしょ。想像上の存在とされる動物。小さい頃にいなかった？」

「……！ 小さい頃……ええと、ペ、ペガサスとかでも」

「うんうん、それね。このところありがちなドラゴンとか龍じゃないのが珍しいよ。大体、聖獣ってのは動物だから階層は低めなんだけどね。で、そのペガサスもずつとお守りしてたみたい」

「あ……小学生の頃、異様にペガサスとかに凝つてて、そればかり絵に描いていた時期がありました。兎に角、物凄い執念だったみたいですけど、ああ、ユニコーンも描いてましたが、ユニコーンじゃなくてとにかくペガサス」

あんまり熱中して天馬を描いてたせいか、それも夢に見ている。

通ってる小学校の校内で、ペガサスに歌を教えてもらった。お菓子も貰った。

そんなまるでお守りをしてもらっているような、夢中で遊ぶ子供の私。

それなのにペガサスは『お別れだ』と云う。

そんなはずはないと駄々をこねて困らせた私を、優しい獣は別れを辞さない意思を宿した美しい瞳で見守ってくれた。

それから、ふとした瞬間に獣は私の元を去った。

あんなに、私の傍に居てくれてお願いしたのに……

顔を涙と鼻水でグシャグシャにしながら、お菓子を食べ、そして歌を忘れないようにずっと歌っていた。

次々と暗闇の底から浮かんでくる泡のように、思い出される夢の記憶。

こうして話していると随分と覚えているのに、なぜ今まで忘れていたんだろう。それに、何を話しても肯定されるこの状況……

「女の子ってのは、その頃が靈性に目覚めるときなんだよ。それがアナタの一つの区切りだったんだろうね。ペガサスはアナタがその段階を迎えるまで、寂しくないように守ってたんだよ。それに本当に子供のお守り<sup>も</sup>」

クク、と占い師は笑った。

「ただね、大事なのもつと別」

『夫』と『聖獣』のリーディングが大雑把な感じがしたと思ったら、本題は別にあっただようた。

占い師はもう一度、そのお尻を揺すって姿勢を正した。

「まだ、何か」

自分から、何が飛び出してくるのだろう。

「うん。もう一人の男の人が見える」

「え」

「この男の人はアナタにとって、とても重要な人らしい。なぜ？」  
「……」

少し、沈黙が天幕内に流れた。

占い師がボウルを真剣に見つめる。

自分もその水に映る“姿”<sup>リーディング</sup>を見ることが出来たなら！

「　　どうやら、コレは……大事件だったみたいだ」

「なんのでしょう」

「アナタの過去世　　直近の前世。“黒衣の戦士”みたいな様子を  
感じる」

私はそこでハツとした。

さっきよりもずっと鼓動が反応している。

“黒衣の戦士”

ああ、その人

その人は

その人は、私を知っている。

だって、私は

(私は……？)

動揺が体中を巡った。

あまり良い記憶ではない。

湿った空気を追い払うように、天幕内に置いてある扇風機が、ブーンと唸る。

首を振ってテーブルクロスを乱し、私の素足にも控えめに風を送っていた。

それでもなくても湿度の高いところだから、天幕なんて張らずにオープンにしたら良いのに。

意味も無く扇風機を見つめて、全く関係のない事を考えているのは、たぶん、リゾート地に昼寝しに来たもう一人の自分。

「何か言えるかい？」

占い師は上着の裾を煽って涼を取りながら私を見る。

「え」

「かなりの衝撃だった？」

「あ……………」

「辛い？」

「……………」

急に酸素濃度が下がる、そんな息苦しさを覚える。

「“黒衣の戦士”は、どうなってますか……………」

「私の口からでいいのかい」

「符合性を、得たいと思います。是非」

「……………その戦士風の人、アナタに忠誠を誓うボディ・ガードみたいな感じ。アナタが深窓のお姫様みたいな、巫女みたいな立場……………に見えるんだが、そういう人を守る専属の戦士と見受けられる」

いつの間にか握り締めた自分の掌に、じつとりと汗が滲んでいた。「ナンだろうね …… どう？ 全てを委ね信頼ゆたしきっていた人が、自分を守って傷つくってのは」

「……………」

何の予告も兆しも無く、占い師を凝視した目から熱いものが急に

溢れた。

あつという間に、頬を伝って下に落涙する。

何で、泣いてるんだろう

まだ、もう一人の自分は不思議そうにしていた。

思い出したから……

知ってる。

そうだった……

自分で戸惑いを覚えるほど滂沱の涙に視界がぼやけ、嗚咽が漏れそうになり慌てて口元を押さえた。

「し　死んでしまっただけです」

どうして、こんなに自分は哀しくて泣いてるのか、見当も付かなかった。胸も、息も詰まる。

“時間を止めて”

“あの人は、私を守って死んでしまった……”

「それも知ってるし、観てるんだね」

頷いて返事とした。

「それが直接的原因かな」

アシスタントの男が天幕の中を覗いて、ティッシュボックスを隅に置く。みつともないとかそんな余裕も無く、「貰います」の断わりも忘れて、私は続けさまにティッシュを四、五枚取って顔に当てた。

それから鼻声のまま、

「わたし……私は、何も出来ない存在でした……平和に、守られていて、何者かも知らないで……何処から敵が攻め込んできて……私が、私の落ち度のために、自分を危険に晒す事態に陥って……応援が間に合わなくて……彼は」

白い雲海のような世界に、まるで神殿と言う趣の天井高い建物の中で、物陰に隠れる私。

周囲が騒がしい。

結界が破れたのだという。

瞬く間に敵が侵入してきて、混乱に陥った。

なぜ、結界が破れたのか？

それは分からないが、自分が原因であろうとは思う。

何か、禁を犯したとでも言うのだろうか。

あいにくと私の居場所は手薄だったのだ。

醜い獣のような異形の生物が、ここを目掛け大挙してやってくる。

狙いは私。

私は戦う術を知らない。

いつも誰かに傳かすわれ護られてきたから。

虚を突かれて、私の傍には『彼』しか居なかった。

多勢に無勢とはこの事なのだろう。

いくら手練れとは言え、敵うわけも無いのに『彼』は、私の護衛

と言う任務を全うしようとした。

もっと、早く

誰かが間に合ってくれれば

それより

自分が戦える手段を持ってたなら

どうみても死にゆくしかない、そして“死”しか見えない『彼』の、“別れ”を告げるその頭を胸にかき抱いて、私はこれからの生きる術を失くしたように途方にくれ、悲嘆にくれ、我が身を呪う。

別離が決定したその瞬間から、死までの瞬間の、その大切な瞬間を万感の思いをこめて、忠実なる僕しもの別れわかに応えた。未来の夫が、戦う力の無い私のために遣わした武将。大好きだったから、ずっと傍にいるものだと思ってた。

でもこれから、たった今、彼は死ぬ。

私を置いて、彼は発った。

私を殺しに来た、魔物の老婆と戦いに。

渾身のオーラを纏った剣と、醜い手指から出る禍々しい光と、それらはぶつかって火花を散らした。

戦いがピークに達したとき、それらが互いに刺し貫く。

分かってたでしょう

だから、お別れを言ったじゃない

分かってる

分かってる

これは仕方の無い状況だから

仕方が無い？

耐え切れないその時が訪れ、私は自分の口から聞いた事も無い、空間をも劈なく叫び声を聞いた。

私を救出しに力強い味方が駆けつけたのは、全てが終わった後だった。

間に合うはずも無い。

私のために、私の大切な人が死にました

胸が張り裂けそう

私の半身が失われたような痛さ

これが、失うと言うこと

急激で巨大な喪失感、私を飲み込んだ。

護るだけなら『彼』一人ではないのに、それこそ私は戦いの力を持たない女であるのに、その他にも私を守る心強い優しさに囲まれて、それでも 今の私には『彼』と、この状況下における己の不甲斐なさに激しく我が身を呪った。

彼が、死にました。

ただでさえ、感度が高く細い神経を一気にすり減らす。

何処へ行ったの。

自分で拭<sup>ぬぐ</sup>うしかないものが、私の魂に刻まれた。

私を守って、私を殺しに来襲した“魔女”と相打ちになった。

「観ました。そんな夢も。何もかも知っててそんな夢を観たんです。自分があまりに非力で無力で、いかに甘えていたかを思い知ったんです。それほど小さな存在でした……ずっと奥底にある意識だっただけなんです。それを改めて夢で思い起こされて、その夢を観てからは随分ものあいだ、理由も分からずにその光景を思い出して苦しかった……」

あの妙な抑圧感と重過ぎる喪失感。私はずっと泣いてたんじゃないかと、そう思えるほどに、自分の精神的な重圧の原因を突き止めた気がした。

自分が恐れているのは、大事なモノを失くしてしまうこと。周りが怖くて俯いているのは、私の動きが“敵”を呼んでしまうから。

しかし、その悲劇的な過去世を思い出して泣いているのではない。納得したからだ。

今までに押し隠してきた、心の奥底にある説明の出来ない重石おとしや戸惑いの正体がはつきりして、自分で納得し認識できたからなのである。

何も誰か見知らぬ人でもいいからと、同情や慰めが欲しいのではないのは確かだ。

暫くの間、私はハンカチを握り締め、テーブル脇のゴミ箱をティッシュでいっぱいしながら泣いた。

占い師は黙って見守ってくれていたが、私が落ち着くの見計らって、

「小さいときってどうだった」と聞く。

「……」

とても怖がりだった。

怖かったのは、暗闇と、大勢の人間。

木々や花々溢れる自然の中に遊びに行くときと違って、見知らぬ人々が行き来する場に居るのは恐ろしい事だった。親ならまだしも、親戚でさえ怖くて仕方の無いヒドイ人見知りだった。

「生まれてから夜泣きも酷かったみたいで、生来の対人恐怖症かと考えてたんですが……」

「うんうん。なんかこの水に見える映像がはつきりしてきた感じするよ。あのね、赤ん坊って夜泣きは当たり前でしょ。でも時には赤ん坊は前世の悲しい事を思い出して泣くつてのもあるんだ。もしかしたらヒドイ夜泣きつてそれだったかもしれない、が　も　うすこし詳しくみてみようか」

今度は片頬に頬杖をついて、水面を眺める。

「整理してみよう。ね。……まずアナタは自分が思うほど小さな存在じゃない。それだったらどうしてこんなに大きなほどの強力な守護があるんだろう。しかもアタシの感じる限り彼らは“この世界のものじゃない”。アナタがいた世界の連中だ。

言ったでしょ。アナタが此処に入ってきたときに“珍しいお客さんだ”つて。たまにいるんだよ。この世界に馴染みの無い人。馴染めなくて見知らぬ記憶に振り回されて悩む人。　でも少し妙だね。次元を超えてまで、この世界に干渉できるほどの力を有しているとしたら思えない、この構図」

そのバツクの大きさを鑑みるに、その力に取り囲まれ守られている、私の存在はそれほど矮小とは言えないらしい。

逆を言えば、『その程度』のものに、なぜこんなに大きな護衛があるのかと、そんな疑問にもなる。

「ここに見えるイメージだと、小さな可愛らしいピンクの花なんだよね。大きな赤紫のコスモスが花を守るようにたくさん咲いている。なんて力強いんだろう。コスモスつて“宇宙”つて言うじゃない。こんなに大きな力に護られて、怖いものなんて無いのにな。

ピンクの花ね、すごく繊細で純粹で、最初から守られるために咲

く花だ。包丁一つ握れないようなお嬢さん花を、守る戦士が居てもおかしくは無いねえ。だから喧嘩を吹っかけられたら守るのは当たり前なもの、場合によっては死んじゃう事もある」

あつて当たり前前のを失う、その衝撃は小さな花の、小さな花びらを散らすほどに大きかった。

「これは普通の人間だつてそうだ。当たり前前に二十四時間守つてくれて、命をかけて忠誠を誓つて、傍にいて、それだけ身近な存在が急に居なくなつてしまつたもの、さぞかしショックだと思うよ。これがトラウマになつて、トラウマはアナタの今生の命題になつてるようだ」

ただ、そういう足手纏いになりかねない者が、わざわざ危険を冒して転生してくる理由にはならない。

「この世界に生まれ来た理由は……分からない。と言つか水がその先を映さないから、これもロツクされてるんだらう。きつと自分で気がつくしかない。ただアナタは彼との約束を果たしにも来た。彼には逢える。それで心の整理をつけるだらう。コレが一つ目」

占い師は、何気なくさらつと言い放つた。

彼に逢う？

あの自分の悲嘆ぶりからして、「てつきり 彼は、彼自身の存在が“消滅”したのだと思つてたんですが……いるんですか」

魔女と戦士、互いに相反する存在同士でしかも相打ちになつていたので、対消滅ついでをしたのだと思つていたのだ。だから、どんな世界に行つても会えないのだと。

「“消滅”してるなら、どうしてここに見えるんだらうね？ 誰かとても大事な人と“再会”の兆しが見えてるし、アタシとしてはそう解釈するしかないんだが……それも、今の生活が大きく変わつてからのようだから……仲間もいるようだし」

「仲間まで……」

そう聞いて、心は躍る。

驚いたり、嘆いたり、哀しんだり、嬉しくなったり、無為に過

したこの数日間、一番忙しい日だ。

占い師はテーブル脇のラップトップパソコンに数字を打ち込むと、さらに続ける。

「星回り（ホロスコープ）が、これまでの生活が根底から引っくり返る角度を取ってるんだよねえ。これは生活の刷新、転職、引越したんかの暗示なんだけど、アナタの場合は……」

もう一度、水ボウルを引き寄せた。

「いま住んでいるところは、時期が来るまでアナタを封印する役目をしていたようだから、そろそろ出て来てもよい頃合じゃないか……」と言っても、アナタの場合はアタシがそう言わなくても分かっているんだと思うけど？」

意味ありげな視線を送る、その目は心なしか笑いを含んでいた。

そう、何故なら私は、全てを知ってるし、全ては予定通りなのだ。つまり、これまでの人生は、私が悩む事ではなかったし、また何の心配も要らないはずだったのだ。

時々、この世界に順応できなくて激しく落ち込んだときに、ヒントになる事象が身の周りに起こっていた。

或いは、私があまりに我儘を言うから、仕方なく寄り道させてその先を示唆していたのかもしれない。

急に自分の中にある芯が、自ら立った気がした。

軸が揺り戻って、もう迷う事も、へたに悩む事も、これまでのそれがいかに馬鹿馬鹿しい事だったか。それから、此処へ来た理由も、を納得した。

占いと言う自己分析ツールは、一つの手段に過ぎない。

私は、自分で答えを得た。

そう思ったら、自然と占い師の視線に微笑みで返していた。

「自分のね、自身に対する答えってのはね、大抵は自分で知っているものなんだ。なぜ自分でそれを見つけれない？ それは自分を見てないからだよ。鏡に映して、その自分の姿をね。占いは無いも

のは見れない。あるものを反射してるだけ」

南の夜は、昼間と同様に濃密だった。

何をしに来たか分からなかった。

でも、そうだ

この風が私を招いたのだ。

天幕を出て、騒がしい俗界に戻ると、急に一陣の風がやってくる。知っている風だった。

「です」

急に彼女は言葉を切った。

「です？ ……で？」

「……いや、そういう話があったって事で」

「いやいやいや、まて。オレは夕飯のカツサンドを頬張ってたから、危うく気管に入るところだった。」

しかし中途半端な。

「続きは？」

「……うん」

頬杖つくと離れた窓の外を見やる。

外は夕立がきて土砂降りだったが、止んだら見事な赤い夕焼けが、夜色の空の隅を焦がしながら沈もうとしていた。

オレンジ色の外灯が、この洋館の庭園に幻想的な夢の訪れを告げている。

こういう景色見てこのセンス、ホントにいつも思うんだが、このマスターは絶対にあの脳味噌は別人の脳味噌だ。

てゆうかなんか、いま彼女から聞いた話が、そのままオーバースプする。

「それで逢ったのが、例の『彼』なワケですか」

カツサンドが、なかなか胃に流し込めないので、噛み締めながらモゴモゴと訊ねた。

その物寂しそうな横顔って初めて見るんだが、けっこうキレイじゃなくて、これって萌（以下略）

「引越してすぐに逢った」

少し深めの呼吸をして溜息をついた。

「え、と、少女漫画も描かない『お嬢さん、ハンカチ落とししましたよ』なんかよりもベタ過ぎて尋麻疹出そうなくらいどうにでもして

くれっという出逢いですか」

「……声かけられたときに、目が合っ、目が合う瞬間に、なんていうのかなあ、物凄い大容量のオンラインデータが一瞬で双方向」「すいません、なんか例えに繊細な情緒性が感じられないんですけど。ええと、アレだ、普通なら『雷が走ったようになってフォーリン・ラブ』なトコでしょ？」

「そうだねー、普通ならそんな感じ。でも雷つてよりもプラズマの方がイメージに近いかな」

「だから、『これはイメージです』でしょうがっ」

カツサンドを口から吹き飛ばしそうに突っ込むと、笑いながらゴメンゴメンと言い、本日二杯目にして食後のアッサム・ティーに口をつけた。

『彼』と出逢ってから、この上ない精神的な充足感、安寧、心地よい眠り。

それもこれも、この魑魅魍魎が跋扈する都会で、『彼』は私にとって以前と同じ仕事をしているお陰なのだが。

『彼』が居ないときは、猫が代わり。

そんな不思議な関係が、もうすぐ一年ほど。

「その話の内容だと、これからなんか大変な事がありそうなんだけど……しかも占い師さんの一つ目ってあったから、二つ目とかどうなってるの」

「ん？ あ、二つ目」

「それぞれ」

「そうだ……占いよりも十年以上前に、ある人に言われてたんだ」「何をですか」

「ちよつと若気の至りで、突っ張っててね……アタシはアウトサイダーって豪語してたら、『あなたはいつか、炎に飛び込む人』って言う人が居たんだ。」

その人、この星のどこかで大地震が起きる前に具合悪くなったり、他人の精神に同化できるとか、自然と話ができたりとか……社会や家族に迫害されても凄く優しくして不思議な人で、そんな境遇で私のことを心配してくれてた。そういう人が、私を言い切った。

穏やかじゃないでしょ？そこに飛び込むってのは、事件の当事者になりかねない状況なんだと思う。でも、何の炎なのか、或いは炎と言うからには何かの戦いがあるのか、先の詳しい事は分からない。

ただ分かるのはね

もう、誰を失っても、自分がどうなっても、自分は一人で立つてなくてはならない。

でも『以前のよう』に『失敗は出来ないし、何も出来ない自分ではいけない。』

敵がいるのも、自分のため。

今度は自分に出来る限り『彼』を守ること。

この世界で許される限り、『彼』を愛すること。

彼女の非情な覚悟を感じて、オレはちょっとナーバスになった。

もしかしたらオレって共感能力バツグンかもしれない。って言うてる場合じゃなくて、いま気がついたんだが、さっきから彼女は話の内容でしきりに「この世界」って言うんだけど……。

「あの……」 試みに控えめに探ってみる。

「何」

「この世界って、ココ？」

テーブルを指差す。

「うん」

「えへえっ。マジで？ ココで何が起こるの？」

「いや、分かんない」

「分かんないって、それもマジ？」

「マジ」

「でも何か分かるんでしょ？」  
何か分かれよっ。

「うん……詳しい話は『彼』も言わないから不明なんだけど、要約するとココの世界の悪い人と、私たちの敵が結託したみたい。それで一応“あつちの世界”でも責任あるってんで、私たちが志願してきたらしい、みたいな」

淡白な表情でしれっと言うから、なんかあんまりさっきみたいな悲壮感ないなあ。

「討伐ですか」

「カツコイイかも」

「戦うんでしょ？」

「まあ、戦いに来たんだしね」

彼女の認識なのか、それとも一般人は「関係者以外立ち入り禁止」のせいかわからないが、もしかしたらこれは地球の一大事とあって話になるわけで、そういう情報は無いんでしょか。不安です。

「あの子、漫画とかみたいな話になるかもしれないんだけど、お嬢様がどうやって戦うの」

そういうところも、不安です。

そういうときのお嬢様は、物凄く可憐で花も手折れないタイプか、または反動激しく炸裂するタイプに分かれやすいので、どちらかと言うと後者の方に一抹の不安がよぎるわけです。

そしてこの星で、どうお暴れになられるのかもチェック項目の一つに加えたと思います。

「私はねえ……」未だ本人は良くわかってない風に言う。

「戦うって言うか、武器アイテム」

「ぶ、武器い？」

「うん。何か剣。誰か仲間みたいな人が『自分の剣を探してる』みたいだから、その人が使うんじゃない？」

「古風って言うか、めっちゃくちゃゲームプレイヤーなんです。事

実は小説よりもゲームに近かったのか……悔れん」

「私も思う。でも、なんだろう、武器にしてもなんだけど、結局色々  
とエネルギーとか形状とか突き詰めていくと、思っても見なかった  
原型に戻っちゃうよね」

「うんうん。最後は総大将とかが、一騎打ちで肉弾戦……って、それ  
って裏読みするとミサイルや銃が当たり前の地球よりも文明は発達  
してるって事ですか」

「あー、それ感じる。飛行機乗ってても鈍くて不器用な遅い乗り物  
なんだって思うもん。車も不便だし、何見てもアナログなんだよね  
デジタル時代って言うのに。石油使う内燃機関を不便に思うのは変  
かな」

嬉しそうに自分の感覚を言葉にするさまは、まさにこの世界の人  
ではありません。

そりゃもしかして、宇宙人が地球に来て、実際に地球に来たって  
のは地球以上の文明があるわけで、上から見てたらこの世界って実  
にくだらないんだろうな。

なにせ、せまい地上で蟻んこみたいなちっこいのが、ワーってア  
ツチ攻めたり、ギャーってコツチ責めたり、ごちゃごちゃやってん  
だから相手にはしてくれないんだろうし。

すっかりSF映画や漫画みたいなのに感化されたオレは、ウソに  
してもホントにしても、何だか「上から視線」になっちゃってしまっ  
た。いや、「上から視線」って悪い意味で捉えがちなんだけどね、そ  
ういう意味じゃなくて。

時間も夜になってしまってたし、盛り上がったんで今日は随分と長居をした。

会計を済ませて、入ってきた小路を逆戻りする。

ふと、彼女が頭を振り上げた。

「……空」

「うん？ あ……」

夕立で空気が澄んだのだろう。暗闇色の夜空の遠くから、星の便りがここにも届いていた。

暫く上なんて見てなかった。

「ね、あれ、天の川」

彼女が指差した方向に、星々が連なって静かに流れる天上の大河があった。全体は見えにくいのが、ぐるりと頭をめぐらして闇夜にちばめられた星屑を仰ぐ。

いつだったか、小さいときに連れてかれた山のキャンプで、物凄い星空を見たことがある。

「星座がさ、分かんないんだよ。星がありすぎて」

ぎっしりとマジックボックスにダイヤモンドやルビーやエメラルドを詰め込んで、その中に放り込まれた感じがした。

南から北へ、西から東へ、何度も何度も身体と頭を回転させながら、まるで宇宙に浮かんでいる感覚がしたものだ。

そのうちに目が回る。いや、感覚がおかしくなる。なぜ？

足元が地面から離れて、「自由」になってしまうのだ。

それは怖いことだ。

もしかしたら、自分達はまだ、地に足をつけていないと恐怖を感じる人類なのかもしれない。

「良く考えたら」

「ん」

「あのヤケに大きい星が二つ見えるんだけど」

「……あ、ホントだ」

星屑の墨流しみたいな河の兩岸にそれぞれ、ひと際強く輝いて互いを呼び合うような星がある。

ゆえなく引き裂かれた距離を、定められた時間に、ただ一度の逢瀬を待つ。

そんな物語が……あつたな。

(……彼女と『彼』も、そういう出逢いなんだろうなあ)

大好きな人って、別に恋人とかじゃなくても、そういうの居るだろ。

その気持ちはどこでも共通事項なんだろうか。

「少年時代にありがちなもと天文おたくの記憶によれば、あれはベガとアルタイルって言ってますけどね。織姫と彦星とも言います。

あの夏の大三角形の一角をなす白鳥座のデネブを天の川に架かった橋にして、で、あの星の中の、何処から来たんですか？」

空は不思議だ。

特に星が見える空。

囁いたフリして何も言わず瞬くから、寂しそうな感じなのに、全然寂しくないんだ。

星がいっぱいあるから？

違うな……星が生きてるから。

「何処って……」

二人とも見上げてるから互いの顔は見えないが、それでもどんな表情か分かる。

彼女は微笑んでる。

「たぶん、ずっと遠い星……」

とても遠い星でも、手の届かない異世界からでも、願えば星の光が教えてくれるだろう。

「逢えたんだね」

「うん。逢えるまで寂しかったけど」

時空の大河を渡って、限られた時間を、大切な一瞬を取り戻しに、ずっと上を見つばなしで首が痛くなってきた。

「聞いていい？」

「なに」

「『彼』とは今後どうなるの？ 一緒に戦うの？」

彼女が押し黙った感じがしたので、オレは少し焦って彼女に視線を送った。

「聞いていちゃ悪かったんだらうか。」

「『彼』は」

「妙に凜とした表情で俺を見返す。」

「『彼』はね」

「先へ進む事に迷いの無い意思を感じる。」

「結果的に、私を守って死ぬわ」

「近い将来、間違いなく、その未来はやってくる。」

「私が居る、この場所を護って。それが『彼』の使命。私との約束」  
でも、この世は仮の世。

「だから、私たちの恋は仮初めの恋。」

「限られた時間と空間を共有し、一瞬の貴方を大事にするためにも、此処へ来たのだから。」

【天河を渡る仮初めの恋 完】

Missing 10 螺旋を描いて舞い上がれ（後書き）

最後まで読んでくださいました、  
根気良く、そして読解力ある読者諸氏に多謝。

盛り上がりには欠けますが、世界の隅っこで語る物語、  
天の川のように密やかに流れるイメージのつもりでした。

恋愛にするつもりが恋愛にならなかった。

ファンタジーにするつもりがファンタジーにならなかった。

ヲカルトにするつもりはなかったがスピリチュアルティスト。

SFかと思いきや脳内ファンタジー。

ジツワとモウソウの練り物。（混合比不明）

ちゃんとやれば「すぺーすふぁんたじー」になるんですが、

いかんせん、三万文字と言う「短編」にするには無理があった点を  
自省します。

（しかも最後のほうで規定三万文字オーバー焦って添削）

と言うのも、この作品の元ネタは、

現在シリーズで連載している物語の外伝「神伝」に当たるもので  
すが、

小説化の目処が立たないので急遽、

七夕小説企画に参加させていただき、投下してしまったモノでした。

いつかいつかいつか、このネタ焼き直しした物語書きたいものです。

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5601e/>

---

天河を渡る仮初めの恋

2009年4月13日23時22分発行